

夢十夜

夏目漱石

第三夜

こんな夢を見た。

六つになる子供を負つてる。たしかに自分の子である。ただ不思議な事にはいつの間にか眼が潰れて、青坊主になっている。自分が御前の眼はいつ潰れたのかいと聞くと、なに昔からさと答えた。声は子供の声に相違ないが、言葉つきはまるで大人である。しかも対等だ。

左右は青田である。路は細い。鷺の影が時々闇に差す。

「田圃へかかったね」と背中で云った。

「どうして解る」と顔を後ろへ振り向けるようにして聞いたら、

「だつて鷺が鳴くじゃないか」と答えた。

すると鷺がはたして二声ほど鳴いた。

自分は我子ながら少し怖くなつた。こんなものを背負つていては、この先どうなるか分らない。どこか打遣やる所はなからうかと向うを見ると闇の中に大きな森が見えた。あすこならばと考え出す途端に、背中で、

「ふふん」と云う声が出た。

「何を笑うんだ」

子供は返事をしなかつた。ただ

「御父さん、重いかい」と聞いた。

「重かあない」と答えると